当科における第三大臼歯抜歯症例の臨床統計的観察 東日本歯学会第66回学術大会

| 著者名 | 島田 敦夫、藤田 景子、吉田 直子、角尾 三咲、秋月 一城 |
| 雑誌名 | 東日本歯学雑誌 |
| 巻 |  |
| 号 |  |
| ページ |  |
| 発行年 | 1999-06-30 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1145/00008413/ |
14. 本学の口腔外科小手術に対する過去10年間の精神状態適応の推移

○小島 薫里, 江上 史倫, 山本 圭子,
 富岡 敬子, 川上 讓治, 道谷 弘之,
 武藤 寿孝, 金澤 正昭, 平 博彦*,
 柴田 敏之*, 有末 真*, 柴田 拓郎**,
 大楠 華子**, 加藤 元康**, 工藤 勝**,
 國分 正雄**, 新家 昇**

（北海道医療大学歯学部口腔外科学第一講座, 口腔外科学第二講座*, 歯科麻醉学講座**)
(49.5%)  

観察出数比：隔在歯齲経部より上方（上頜、下顎とも約87.0%）

歯齲傾斜：上顎→正常（68%）、下顎→正常、近心傾斜、

水平（各約30%）

予後：予後不良報告28症例のうち後疼痛（83.3%）

抜歯症例の年齢分布が20代に高頻度だったのは診断出

年齢の合致、矯正治療の普及、顔の未発達等が推察でき

る。観察状態では不潔域となる状態や観察不能状態での

抜歯が多く認められた。これらより第三大臼歯の抜歯は

歯正処置や予防外の疼痛、歯科医師の勤務によるものが

多く口腔全体の健康への影響が深くなると考えられる。

またPOMSの観察により状態によっては著しい心理変

化をきたすということが示された。今回の観察で臨床におけ

る抜歯決定の重要性と責任、患者の心理的負担の軽減に

ついて改めて考えさせられる結果となった。

16. 半導体TiO₂の光触媒効果に関する研究

——C. albicansに対する抗歯効果——

〇久保 裕治、澤田 救彰、坂口 邦彦、
馬場 久衛*、日景 盛、秋馬 秀成
（北海道医療大学歯学部歯科補綴学第二講座、口腔細菌学講座*）

I. 目的

我々は、人体に対して影響が少なく、光が照射された
ときに抗菌、殺菌作用が発揮されるTiO₂を歯科材料に応
用することを考えた。

C. albicansに対して、TiO₂粉末を添加した時の抗菌効
果、及びアクリルレジン、12%金銀パラジウム合金表面
に形成したTiO₂薄膜の抗菌効果について検討した。

II. 方法

粉末：TiO₂微粒子にはP-25、光源は近紫外線の蛍光ケ
ミカルランプを用いた。

菌液は、TiO₂粉末濃度0.5%, 1.0% (w/v) とよく均一に
ように混合したものをシャレーに分注し、室温より5 cmに配
置し、光照射した。照射時間30分毎に120分までの反応液
を回収し再生菌数を求めた。

薄膜：円板状試料（φ15mm x 1 mm）表面にTiO₂薄膜を
形成した。[アクリルレジン：未処理、80℃15分2回加
熱処理、金銀パラジウム合金：未処理、80℃20分加熱処
理、350℃30分加熱処理] この試料に菌液（最終濃度
2.0×10^7/mL）を滴下し、光照射した。照射時間は金銀パ
ラジウム合金で30, 60, 120分、アクリルレジンは60, 120,
180, 240分とした。照射後菌液を回収し、再生菌数を求め
た。

III. 結果と考察

TiO₂粉末、TiO₂薄膜共に光触媒効果によって、C. alb
icansに対する抗菌性が確認された。

粉末試料では、その濃度は高く、光照射時間は長いほ
ど大きな抗菌効果を示した。

薄膜試料の基材材質により抗菌効果に差が生じ、金銀
パラジウム合金ではアクリルレジンに比べ、短時間でよ
り強い効果がみられた。

金銀パラジウム合金では、表面処理条件により、抗菌
効果に差が生じた。

金銀パラジウム合金では、その成分の影響と考えられ
る抗菌効果が認められた。

17. Porphyromonas gingivalisのPrevotella intermedia
との共凝集に関与する1成分の遺伝子のクローニングについて

〇鎌口 有秀、宮川 博史、寺山 千恵、
馬場 久衛
（北海道医療大学歯学部口腔細菌学教室）

（目的）細菌が歯周局所に定着する機能の一つとして,
既に定着している細菌に結合することにより間接的に定
着することが考えられる。これは共凝集として観察でき
る。今回はPorphyromonas gingivalisのPrevotella inter
mediaとの共凝集に関与する因子について検討した。

（方法と結果）P. gingivalisとP. intermediaとの共凝集

(236)